

自閉症の少年の語りとサバイバルの可能性

——『マルセロ・イン・ザ・リアルワールド』

吉田純子

Abstract

Francesco X. Stork's adolescent novel *Marcelo in the Real World* (2009) portrays a first-person narrator, Marcelo Sandoval, who is a 17-year-old Mexican-American with autism. His father, a graduate of Harvard Law School, lets Marcelo work part-time during the summer holidays at his firm, a place the father calls "the real world."

Unlike the "impossible" assertion of the premise of "universal childhood," analyzed by Jacqueline Rose's *The Case of Peter Pan*, this post-modern protagonist is represented as a member of two social minorities: Mexican and disabled. This paper examines the complexity and authenticity of Marcelo's voice, comparing this novel with autobiographical books by autistic authors. I also explore the possibility of the challenged youth's survival in a Pierre Bourdieu's habitus-oriented world, where WASP-dominated American society has actually placed severe obstacle to his father's professional success.

キーワード: アメリカ思春期小説, 自閉症スペクトラム障害, 児童文学の不可能性, ハビトゥス, 中間地点の空間。

Keywords : American Adolescent Novel, the autistic spectrum disorder, impossibility of children's literature, Habitus, in-between-spaces.

1. はじめに

フランシスコ・X・ストーク (Francisco X. Stork) の思春期小説『マルセロ・イン・ザ・リアルワールド』(*Marcelo in the Real World*, 2009, 以後『マルセロ』と記す) は, 17歳のメキシコ系アメリカ人の少年マルセロ・サンドヴァル (Marcelo Sandoval) が一人称で語る一夏の冒険物語である。私立養護学校生の主人公には, 自閉症スペクトラム障害¹⁾を連想させるいくつかの特性が見られる。彼には耳からではなく頭の中から「内なる音楽」(3) が聞こえる, 自らが「特別な関心」(21) と呼ぶ強いこだわり (とくに宗教へのこだわり) がある, 人との相互交流が苦手である, といった自閉症の特性をもつ。

ハーバード法科大学院出身の弁護士, 父親アルトゥーロ (Arturo) は, 自身が「リアルワールド」(20) と呼ぶ共同経営の法律事務所で, 夏休みにアルバイトをするよう息子を促す。マル

セロは, “Arturo is basically asking me to pretend that I am normal . . . for three months.” (23) と理解して父親の提案を受け入れる。

本稿がこの作品で検証・分析するのは、次の互いに関連し合う可能性についてである。(1) アスペルガー症候群（知的障害を伴わない自閉症スペクトラム障害）のマルセロが第一人称の語り手として、どこまで彼の「声」の信憑性とその複雑さを表現できるのか。換言すれば、作者ストークがどこまでリアルに自閉症的特性をもつマルセロの言動や感覚に根差した人格とその世界観を読者に提示できるのか、ということ。(2) 養護学校とは異なる競争社会リアルワールドで、自閉症の少年が果たして居場所を見出し、仕事を全うできるのだろうか。あるいは、ストークがどのような生き残りの選択肢をマルセロに与えることができるのか、ということ。

英米児童・思春期文学において、障害者の主人公を描く作品が1990年代から2000年代にかけて増えてきた。にもかかわらず、障害者を描く思春期文学のまとまった研究書はまだ数少ない。パトリシア・A・ダン（Patricia A. Dunn）の *Disabling Characters: Representations of Disability in Young Adult Literature* (2015) は、その代表的な研究書である。本稿は、「障害をもつ子どもたち」（challenged children）が、障害ゆえの生きづらさの限界に「挑む子どもたち」（challenging children）として、いかに描かれているかを分析し、ダンの研究に続くものである。

さて、障害者を描く思春期文学の「可能性」を問う本稿のテーマの性質上、「児童文学の不可能性」(1) の議論を仕掛け、論争を巻き起こした、ジャクリーン・ローズ（Jacqueline Rose）の『ピーター・パンの場合』（*The Case of Peter Pan*, 1984）を参照してみたい。これは、児童文学の子ども観について、純真無垢なロマン主義的子ども像を描くそれまでの児童文学研究に一石を投じた批評書である。

ローズは、事例としてJ・M・バリヤー（J.M. Barrie）の『ピーター・パン』もの²⁾を中心に提起し、「児童文学の不可能性」の理由を以下のように3点あげている。第1に、児童文学では、“[the] image as purity itself, embodied by the eternal child” (141) という仮想の子ども概念が大人の作家の欲望と願望によって作られている。ローズは言う、

Suppose, therefore, that Peter Pan is a little boy who does not grow up, not because he doesn't want to, but because someone else prefers that he shouldn't. Suppose, therefore, that what is at stake in *Peter Pan* is the adult's desire for the child. (3)

第2に、その子どもは、性的、社会・文化的的不平等などの矛盾を知らない、無垢な存在として描かれている（8-9）。第3に、作品が想定する子ども読者像も同じく非現実的であるという。そもそも、想定される子ども読者は、階級的・文化的・言語能力的に本質的な差異のない子ども像を前提としている（7）。更に踏み込めば、それは子ども読者の人種的・セクシュアリティ的な差異を認めることもない、というのである。

本稿では、以上のようなローズの「児童文学の不可能性」の議論を参照しながら、『マルセロ』で描かれる自閉症の主人公像の可能性を検証・分析する。

2. リアルワールド

ここでは、父親アルトゥーロが息子に参入を促したリアルワールドとはどのような世界なのか、そしてこの世界でのマルセロの立ち位置がどのようなものかを考えてみたい。マルセロの職場は、父親がスティーヴン・ホームズ（Steven Holmes）と共同経営するサンドヴァル・アンド・ホームズ（Sandoval & Holmes）法律事務所の郵便物集配室である。アルトゥーロによれば、リアルワールドはルールに支配されており、「普通」で「正常」な人間から成り立つ競争社会である（20-21）。この世界の成員は、与えられた職責を果たしてリアルワールドの維持に努めることになっている。

さらに、アルトゥーロにとってこの世界は、弁護士として戦う「戦場」である、と次のように言う。

“Every day I come to work, I tell myself, I’m a warrior and this is a battle. I put on my war face. . . It’s a way of saying that I understand I will need to watch out for people’s motives and I will need to be competitive –like in a war, where some will win and some will lose.” (46)

カトリック教徒でメキシコ系のアルトゥーロは、WASP（アングロサクソン系新教徒の白人）優勢のアメリカ社会で出世の階段を上るために、白人弁護士と武装中立状態を維持して、サバイバルの戦いをしてきた。

父親の法律事務所でアルバイトをしている、ハーバード・ロー・スクールの学生ウェンデル・ホームズ（Wendell Holmes）は、マルセロに職場での人間関係の政治的かけ引きを教え込む。“My father and your father, despite their hatred for each other, have never betrayed their bond —based on mutual need to be sure, but a bond nevertheless” (131)。ウェンデルによれば、「メイフラワー・弁護士」（ボストンの名家出身の白人弁護士という意味。127, 129）の父親は、「マイノリティ・被用者」（127-28）であるマルセロの父親と法律事務所を共同経営している。スティーヴンとアルトゥーロとは、言わば戦略的互惠関係を結んでいる、というのである。

ここで、フランスの社会学者ピエール・ブルデュー（Pierre Bourdieu）のハビトゥス理論が、リアルワールドでのアルトゥーロの戦いを理解するのに役立つだろう。「ハビトゥス」とは、人間が特定の環境（階級・集団）の中で、その環境特有の行動や知覚の様式を身体を通して無意識的に習得・実践し、階級や集団の成員として再生産されてゆく性向を意味する（『ディスタンクシオン』II 337-38; 宮島 1040）。これをアルトゥーロの日常に適用すれば、法律事務所・「社会界」³⁾として描かれる「場」（彼の言葉で「戦場」）において、彼がこれまで「戦士」として戦ってきたということになる。「場」とは、それ自体が他からある程度自律した、様々な力が競合する時空間であり、その内部で地位や立場をめぐる闘争が行われるような世界である（Bourdieu, “The Field of Cultural Production” 312, 319）。

そして、ホームズ父子にハビトゥスを適用すれば、息子は「メイフラワー・弁護士」の父親の影響下、暗黙の訓練を受け、父親と同じハーバード法科大学院に進学し、夏休みは父親の法律事務所アルバイトをして、将来的に弁護士として再生産されるのを待っている。

さらに、ブルデューによれば、被支配者（周縁化された人びと）には、置かれた社会では二者択一の生き方しかない。1つは、支配者により恥ずべきものとされた自分や所属集団に忠誠を誓うこと。たとえば、「ブラック・イズ・ビューティフル」とか、「ゲイ・プライド」⁴⁾のようなアイデンティティ表明がそれである。もう1つは、他者との差異である自分の固有性を最小化しながら、支配者的理想に同化する努力を重ねること（『ディスタンクシオン』II 209）。アルトゥーロは、二択のうち後者を選び、差別の屈辱に耐えつつ WASP の理想的男性像に同化する自己イメージを作り上げてきた。

このように、WASP 優勢の社会で強力なハビトゥスの習俗が奏功するリアルワールドでは、マルセロの立ち位置は次のようなものになる。マルセロは、ローズが「児童文学の不可能性」で批判した子ども像とは違い、2つの社会的マイノリティ——メキシコ系と障害者——を表象する。しかも、初出勤するや、彼は職場の人びとから「認知障害」(54)、「フォレスト・ガンブ」(65)、「知恵おくれ」(77)として迎えられたために、正常のふりをするのが難しくなる。結局、彼は「普通」「正常」な人間とは見なされず、リアルワールドの成員から外されてしまう。

3. リアルワールドでのモラルディレンマ

ダブル・マイノリティとして法律事務所で働くマルセロは、3つの難題に直面する。第1の難題は、同じ事務所で夏期にアルバイトをしているウェンデルとの間に生じる。彼は、当初、社交的で「正常な人」のように見えた。ところが、まもなく、セクハラを目的にマルセロの上司の女性事務員ジャスミン（Jasmine）を自家用ヨットに連れこみたいという、強迫的な欲望の持主であることが判明する。彼は女性への「特別な関心」に捉われていて、ジャスミンを連れてくるよう執拗にマルセロに迫る。職場での良好な人間関係を優先させるべきか、女性上司を護るべきか、というディレンマでマルセロは悩む。

第2の難題は、1枚の写真によって引き起こされる。「ゴミ」と書かれた書類箱の中から見つかったその写真には、自動車事故に遭い、フロントガラスの破片で顔半分に重症を負った少女イステル（Ixtel）が写っている。“How do we go about living when there is so much suffering?” (166)、と問いかける少女の視線に駆りたてられて、マルセロは真相を究明する。その結果、顧客ビドロメック社の欠陥フロントガラスがイステルの顔と人生を奪ってしまった、という事実突き当たる。アルトゥーロは、この企業が欠陥を承知で製造し続けた、という証拠を入手していたが、法律事務所と顧客の利益優先のために証拠書類を隠匿する。マルセロは、イステルが顔の再建手術の費用を勝ちとるのを助けるために、ビドロメック社と争う他の弁護士に協力すべきか、それとも、組織のトップで、父親でもあるアルトゥーロを助けるべきかのディレンマに陥る。

そして、第3の難題は、父親のセクハラ事件の発覚により引き起こされる。兄を亡くしたばかりのジャスミンの悲しみにつけこみ、アルトゥーロが彼女をオフィスに誘ってセクハラ行為を働いた。マルセロは、父親が常に正しいと信じて疑わなかったし、上司ジャスミンの“*Saying no to anyone is not a problem for me.*” (266) という言葉も信じていた。誰よりも信頼する二人の間の出来事にマルセロは苦悩する。3つの難題のどれもが、マルセロにモラルディレンマを惹起するよう描写され、彼の宗教への強迫的関心に接続されている。

4. 視点の逆転

マルセロは、前述のように正常ではないとしてリアルワールドの成員から除外されると、父親の言う「正常」「普通」「病気」という考え方に異議を唱える。“I view myself as different in the way I think, talk and act, but not as someone who is abnormal or ill” (55). では、マルセロにとって病気とは何かと言えば、次のように説明される。“If it keeps you from functioning in society the way people think a normal person should, then our society calls that an illness” (55). この言葉は、やがてリアルな世界の「正常」な「普通」の人のびとに投げ返されて、皮肉な響きをもつようになる。つまり、ウェンデル、法律事務所、アルトゥーロは、社会の中で果たすべき役割を果たしておらず、彼らこそ異常で病気ではないかと言う。

マルセロの役割について、批評家ダンは次のように述べる。

... the familiar is made strange as we see it through Marcelo's ... eyes. Because readers see the world through [his] perspective, it is not [his] behavior or thinking that seems strange or odd, but that of people in the so-called “normal” world. (133)

この視点の逆転は、マルセロの場合、自閉症の特性の1つであるこだわり（彼の場合、宗教へのこだわり）と関係しており、そこで得られる知恵が彼の価値観に影響を与えている。マルセロはカトリック教徒だが、ユダヤ教の女性ラビ・ヘッシェル（Rabi Heschel）と定期的に会い、聖書を含めた宗教的な本について対話するセッションをもっている。彼は、ウェンデルの邪な企てで悩んでいる最中、ラビ・ヘッシェルから邪な性について次のように教えられる。

“Anytime we treat a person as a thing for our own pleasure. When we look at another person as an object and not as a person like us. When sex consists solely for taking and not giving. When a person uses physical or psychological force to have sex against another person’s will. When a person uses sex to physically or emotionally hurt another.” (120)

こうして、マルセロは、宗教・倫理的な対話から得た知恵によって第1と第3のモラルディレンマの解決に向かう。彼はウェンデルのセクハラ行為の援助をきっぱりと拒否する一方で、セクハラを働いた父親とも意を決して対決する。

さらに、第2の難題についてマルセロは自問する。“How did Ixtel become real for me? The world is full of Ixtels who I can help without hurting my father. Why this one? How was it *her* suffering that touched me?” (252). その答えも、ラビ・ヘッシェルとの対話の中で得られる。彼女が自らの神学校進学（神の「召し」）について確信を持てたのは、モーセの「燃える柴」⁵⁾のように熱く燃えるものを心に感じたときだった、と言う。「神の召し」という抽象概念を、自閉症のマルセロは、「燃える柴」という画像に置き換えて理解する。この画像がマルセロの問いに答える。“‘Burning.’ I know exactly what she’s talking about. ... *Ixtel was the match*, I said to myself” (275). つまり、マルセロの使命感をマッチのように燃え立たせたのが、イステルの写

真（画像）であると気づく。次章で述べるように、彼は「絵で考える」という自閉症的特性の1つを見せている。イステルの写真により使命感（火の点いたマッチ）を喚起された彼は、ディレンマを脱する。その結果、マルセロは、父親を窮地に追い込むのを承知で、欠陥フロントガラスの証拠をイステル側の弁護士に差し出す。

こうして、彼のディレンマの対処法から透けて見えてくるものは、彼の自閉症的特性である、宗教への強迫的関心や独特の思考法こそが解決の道を開いている、ということである。

5. 「声」の信憑性を探る

ここでは、マルセロが読者にどのようにリアルな者として提示されているのか、或いは、彼の「声」の信憑性を探る手がかりを考えてみたい。

この疑問解明については、自閉症当事者によって書かれた何冊かの自叙伝が参考になると考えられる。アメリカではテンプル・グランディン（Temple Grandin）の『我、自閉症に生まれて』（*Emergence: Labeled Autistic*, 1986, 以後 *Emergence* または『自閉症に生まれて』と記す）、オーストラリアではドナ・ウィリアムズ（Donna Williams）の『自閉症だったわたしへ』（*Nobody Nowhere*, 1992）、イギリスではカムラン・ナジール（Kamran Nazeer）の『ぼくたちが見た世界』（*Send in the Idiots*, 2006）、日本では東田直樹の『ぼくが跳びはねる理由』（2007）などは、すべて自閉症当事者によって書かれたものである。本稿では、グランディンとナジールの作品を取り上げるが、特に本章では、グランディンの『自閉症に生まれて』の詳細な分析を通して、マルセロの「声」との共通点を探りたい。

では、『自閉症に生まれて』でテンプル・グランディン⁶⁾が描く一人称語り手で主人公のテンプル像を詳しく見てみよう。2歳のとき神経内科の医師から「脳の損傷」を告知され、3歳半まで言葉が話せず、後に自閉症と診断されたテンプルは、痙攣、奇声、暴力でしか不安や知覚過敏の不快感を表現できなかった。彼女は、自閉症の神経発作、感覚過敏、感覚の混乱に苦しみつつも、その治療法を探し求める幼児から30歳代までの半生を物語る。彼女は、小学2年生の頃、自分を楽にする「魔法の機械」(36)を夢見るようになる。

I began dreaming about a *magical device* that would provide intense, pleasant pressure stimulation to my body. . . . As an adult, I know now that my childish vision of a *magic machine* was my search for a means to satisfy my damaged nervous system's craving for tactile stimulation. (強調引用者) (36)

テンプルは、「魔法の機械」を求めて象徴的、かつ実際の様々なドアを通過して、リアルな世界に参入するまでの半生を次のように語る。“... I have moved from my series of symbolic doors into the *real world*” (強調引用者) (149)。こうして、儀礼的に通過する3つの扉が作中で提示される。

第1の扉は、高校の屋上に通じる「小さな木戸」(84)であり、その先には校則が出入りを禁じる「物見塔の小部屋」(85)がある。この小部屋が自閉症の人に必要なクールダウンの場所と

して魅了するため、テンプルは禁を犯して扉を通過する。そして、安らぎ、緊張緩和、喜びに通じるこのドアを“the door to my Heaven”（84）と呼ぶ。実際、この高校で彼女は、カーロック先生（Mr. Carlock）との出会いを通して、締具（squeeze machine: 自閉症者や農場の家畜の身体を抱きかかえるように締めつけて安心を与える装置）の開発という強迫的関心が建設的なプロジェクトに発展する（90）。

第2の扉は、テンプルが大学進学後に、「学生寮の屋上への跳ね上げ戸」（111）として立ち現れる。禁じられたドアを通して未知の空間に踏み出すテンプルは、アカデミアの未踏の研究領域に乗り出す自己イメージと重ねて描出される。

第3の扉は、彼女が大学院で学ぶ頃、その町の「スーパーマーケットのガラス戸」（122）に表象される。つまり、彼女は、このガラスの引戸に強迫的にこだわり、スーパーマーケットの前で何度も出入りを繰り返す。ここでテンプルは、立ちはだかる障害物・ガラス戸を大学院での研究テーマの象徴として描く。

こうして、彼女は、数々の象徴的・物理的扉を通過しながら、「魔法の締具」を開発する一方、家畜関連の動物学の学位を取得すると共に、締具や家畜用設備のpatentを取得し、リアルワールドへの参入を果たす。この一風変わった物語の魅力とテンプルの「声」の独自性は、感覚過敏や強迫的関心などの自閉症的特性に沿った、魔法の締具や扉の象徴的叙述にあると考えられる。

さて、苦闘の半生を語るグランディンは、なぜ現実の入り口や扉を象徴的な扉として描くのだろうか。それは、彼女の独特の思考法や自己表現に由来する。

I think in pictures. Words are like a second language to me. I translate both spoken and written words into full-color movies, complete with sound, which run like a VCR tape in my head.
(*Thinking in Pictures* 3)

言葉がむしろ二次的なものであり、「絵で考える」という彼女の思考法は、とりわけ思春期以降に彼女の成長を助けた。

Growing up, I learned to convert abstract ideas into pictures as a way to understand them. . . . As a teenager and young adult I had to use concrete symbols to understand abstract concept such as getting along with people and moving on to the next steps of my life, both of which were always difficult. (17)

このようにグランディンは、締具の研究・開発を求める人生で、人びととの軋轢や教員の不理解に出会うと、「絵で考えて」その困難に対処する。具体的には、現実の入り口や扉を何度も出入りすることで、困難を突破する自己イメージを描き、人生の次なる段階に進む。

他方、ストークの描出するマルセロはどうであろうか。彼もモラルディレンマの解消のために、宗教的への強迫的「特別の関心」を発動するとともに、自閉症的特性である聴覚・視覚・触覚の過敏症や混乱を抱えた日常を生きている。彼の場合、特異な表現ではあるが、沈黙の中から

音楽を思い起こすように祈る。“Remembering what?” ‘It’s a word I use for praying. Sometimes it’s like waiting for music to come out of the silence’” (*Marcelo* 147). ジャスミンとマルセロのこの会話で、「想起すること」(remembering) が祈ることである、とマルセロは言う。或いは、想起することが聞くことでもあるとも言う。それは結末部で次のように表現されている。

Then [Jasmine] walks to where I stand, and she kisses me softly on my cheek. And when she steps out, I *hear* or I *remember*, I can’t tell which, the most beautiful of melodies.” (強調引用者) (312)

すなわち、ジャスミンがマルセロの頬にキスをして部屋を出ていくと、音楽が思い起こされるように聞こえてくる、というのである。ジャスミンの優しい思いを受け止めたマルセロの心の中で、聴覚と想念の混合が起こる。このように語るマルセロの物語は、不思議な魅力で満ちている。頭の中から、それとも耳から聞こえてくる音楽が、記憶の中の音楽か、自分の祈りの言葉なのかはさておき、困難に直面する彼を正しい方向に導いていく。想起すること、祈ること、聞くことは、彼の宗教への強い関心と渾然一体となって物語を導いていく。

マルセロの語りに見られる音声、記憶、想念の混同は、自閉症の人びとによるよく見られる感覚の混乱という現象であり、グランディンの場合、自伝では例えば、電話のベル音を聞いてパニックに陥るなど、感覚過敏や神経発作として表現されている。

Various stimuli, insignificant to most people, created a full blown stress reaction in me. When the telephone rang or when I checked the mail, I’d have a “stage fright” nerve attack. What if I didn’t get any mail – or what if I did – and it was something bad? The ring of the telephone set off the same reaction – panic. (*Emergence* 76-77)

グランディンによれば、重度の感覚処理の障害を抱えている者は、視覚、聴覚、その他の感覚が混乱することがあり、この症例として、視覚、聴覚、触覚が混乱するある大学院生を紹介している。彼は音を通して色を感じ、顔に触れると音を聞いたような感覚に襲われる、というのである。

He described difficulty hearing and seeing at the same time as his sensory channels got mixed up. Sound came through as color, while touching his face produced a soundlike sensation. (*Thinking in Pictures* 71-72)

グランディンは、感覚過敏の緩和のために、「締具」を開発し、混乱した感覚の調整(統合)を図った(*Ibid.* 75; *Emergence* 111)。他方、マルセロの場合、「感覚統合」⁷⁾は後述するように、ハフリンガー種のポニーによる乗馬療法に向かう。

6. マルセロの居場所

マルセロの「声」の信憑性は、リアルな世界でのマルセロの居場所、或いは、そこで生き残るための選択肢と関連している。注意すべきは、生き方の特性として、主人公がこだわりを否定したり、「正常化」を目指したりしていないことである。この意味で、障害についての社会モデル (social model) という観点から、彼の成長を捉えることができる。障害者の社会化に関して、社会モデルは、しばしば医学モデル (medical model) と対比される。社会モデルは、障害を差異と捉え、障害にまつわる問題の解決法が個人と社会の間の相互作用を変えることにあり、と考える。他方、医学モデルは、障害を欠損、異常と捉え、障害にまつわる問題の解決法が個人を治療し正常化することにある、と考える (“Families Helping Families”)。第4章で述べたように、マルセロは自分が病気だとか異常だとか考えていないし、自閉症という自己の差異を小さくしたいとも思っていない。

さて、ブルデューのハビトゥス理論から見てマルセロは、第1の選択肢を選ぶ。つまり、彼は、優勢集団によって恥ずべき、異常なものと見なされる人や集団にこそ帰属意識をもっている。これに対して、父親アルトゥーロは、自身の人種的・文化的差異を最小化して、WASP 優勢の社会での理想に同化する、という第2の選択をした。

或いは、ポストコロニアル風に言えば、マルセロは、二重のマイノリティとしてリアルワールドの境界を超えた所に自分の居場所を見出す。それは、ジャスミンのバーモント州の実家へマルセロが同行するエピソードに描かれている。そこには、ジャスミンの老父、幼なじみや近隣の人々が寄り集まって来て、マルセロを排除するのではなく、ごく自然に食卓を囲み交流する様子が描かれる。彼は農場で犬や家畜に触れ、山野を歩き、満天の星空を仰ぐ。また、ジャスミンは、湖畔のキャンプ地でマルセロと寝袋を並べながら、将来、老父の介護のために実家に戻り、敷地内に作曲用にスタジオを建てて、やりくりしながらこの農場で生きていく、という計画をマルセロに打ち明ける。

マルセロは、ジャスミンに対して “Vermont is where you belong.” (309) と気づき、やがて自らもボストンのリアルワールドを離れて、この地に居場所を移す決心をする。結末部で、彼は、新しい居場所での将来の計画をジャスミンに打ち明ける。彼は、養護学校から普通の高校へ転校した後、バーモントの大学へ進学し、看護専門コースで看護師の資格を取得する、と言う。しかも、今まで養護学校でしてきたように、ジャスミンの農場でも、「自閉症や障害をもった子どもたちのため乗馬療法をしたい」、と打ち明ける。“I could get some Haflinger ponies and provide hippotherapy to autistic and disabled kids” (310-11)。テンブルの締具が感覚統合の療法となったように、マルセロのハフリンガー種のポニーは、自身と他の障害者の感覚統合に寄与すると共に、彼に居場所を提供するのである。

従って、ポストコロニアルリストのホミ・K・バーバ (Homi K. Bhabha) の以下の言葉が、リアルワールドを超えた所に立つマルセロの居場所とその主体形成を考える上で参考になるだろう。

人種、社会的な性差、世代、組織や機構の場所、地理的政治的な地域性、ホモ、ヘテロといっ

たような性的欲望のありよう——こうした主体の位置が、現代世界でアイデンティティを主張するとき、必ず付きまとう。(中略) そうした主体性を考えるにあたって、起源を語る物語を超えることだ。代わりに必要となるのは、文化の差異が分節化される際のプロセスや契機に注目することである。(中略) 「中間地点の」空間こそは、こうした自己の主体性についての戦略を磨く領域となる。(強調引用者) (『文化の場所』2)

マルセロは、父親が語る物語 (WASP 優勢の社会で、自己克己して社会的に成功するという物語) を超えたところに出現する「中間地点の」居場所を見出したのである。バーモントを居場所とするジャスミンに加わり、そこで次なる自分の主体位置を探ることになる。

イステルの事件で父親の法律事務所を窮地に追いこんだマルセロは、解雇される。父親の与えた仕事を達成できず、リアルワールドの維持にも貢献できなかったからだ。しかし、批評家ダンは、マルセロが独自の成功を遂げたことを評価する。“Marcelo has succeeded in a way that his father's law firm will not define as success” (130). つまり、第4章で述べたように、法律事務所で彼が直面した問題を、彼独自のやり方で解決に導いたのである。ダンが示唆するように、アルトゥーロは息子の行動の所為で、法律事務所の倒産を免れるべく、イステルの弁護士と示談金の支払い交渉をする。その結果、イステルが顔の再建手術を受けられるようになり、その一方、法律事務所は顧客を失うことなく、ビドロメック社も欠陥商品の改良に乗り出すことになる (304-06)。

7. 再燃する「児童文学の不可能性」の議論

これまで本稿は、“universal child”ではないマルセロ像を追ってきたが、一方で、この作品で純真・無垢でロマン主義的少年像が提示されていることも指摘せねばならない。ここでは、無垢なるマルセロ像について考えてみたい。例えば、ラビ・ヘッシュェルとの対話場面では、イノセントなマルセロ像が強調される。性を邪な目的に使うなんて想像できないと言うマルセロに、ラビは答える、“That's because you are special. You walk with God in Eden” (119). すなわち、ストークは、マルセロを墮落前のアダムのように無垢なる存在として描き (qtd. in Margolis 29), ラビの眼を透過させて天使のようなマルセロ像を読者に提示する。ラビは、マルセロの純真性を作り出す、いわばフィルターの役割を果たしている。

そこで、『マルセロ』を自閉症当事者カムラン・ナジールによる『ぼくたちが見た世界』と比較してみよう。この作品では、イノセントではない、悪をも為し得る青年、コンピューター科学者のアンドレ (André) が登場する。子ども時代彼は、言葉が自由に操れず、10歳になるまで特別支援学校に通っていた。また、言語のコミュニケーション不足を補うために、操り人形を自分の代理として使っている。ナジールは言う、“André had found an unusual way of overcoming his difficulties with conversation” (11).

この人形術は、アンドレが青少年犯罪の矯正施設に収監されていたとき、ある人物から学んだものだった。施設に収監されたのは、街中でぶつかってきた相手にアンドレがパニックを起こし、暴行を加えたからだった。だが、彼は自閉症の診断書ゆえに、殺人未遂での起訴を免れた。

その後、彼は自己崩壊^{メルトダウン}を防ぐために、人形術で自己防衛するようになった、とナジールは語る（47）。自閉症当事者ナジールの語りは、自閉症者の具体的な心身の症状の苦しみをよく知っているからこそ、アンドレの厳しい現実を語るができるのであろう。

さて、ここで、自閉症当事者と「健常者」との線引きについて触れておきたい。近年は、アメリカ精神医学会による診断統計マニュアル DSM-5（2013 年）で「自閉症スペクトラム障害」という呼称が提唱されたことを受けて、スペクトラム（連続体）という概念も定着してきた。つまり、連続体という観点からは、自閉症スペクトラム障害に連続して、「非障害自閉症スペクトラム」という状態もある。障害の症状が寛解して、「非障害自閉症スペクトラム」になるとか、本人の自覚や周囲の認識もない「非障害自閉症スペクトラム」または「健常者」もあり得る。例えば、『ぼくたちが見た世界』の語り手ナジールは、自身が自閉症ではなくなったこと、つまり、寛解した「非障害自閉症スペクトラム」であることを作中で何度も言及する（184, 188, 217, 229）。このように、自閉症に関しては、いわゆる「健常」と自閉症スペクトラム障害との間に境界線を引くのが困難であると言われる（本田 92, 107-08; 杉山 51）。

では、作家ストークはどのような立ち位置にあって、このフィクションを書いたのだろうか。ストークは、「作者のあとがき」で、自閉症者に関して 2 つの情報を提供する。第 1 に、彼が学生時代にラルシュ・ホームの常駐スタッフとして、発達障害者と「健常」者が障壁を越えて共に学び合うという共生生活をしていたこと。第 2 に、作者が自閉症の甥に捧げた本書を、何時か彼に読んでもらいたいと願っていること。しかも、甥っ子が自閉症のマイナス面を克服できるという誇りを抱いてほしい、という希望的観測を作者が抱いていること。

During my senior year, I moved full-time into a newly founded home that was part of L'Arche – a faith-based community where persons with developmental disabilities and “normal” persons lived together and learned from each other with as few barriers between them as possible. . . . I want to dedicate this book to my nephew Nicholas, who I know will one day read this book with pride in his ability to overcome the negative aspects of autism. (“Author’s Note”)

この「あとがき」が示唆するのは、作者ストークが自閉症の人びとの困難や苦しみを身近に見聞する立場にあったことである。彼が自閉症を抽象概念で捉える人でないことは確かである。それどころか、身内の自閉症障害者の療育・治療に希望的観測を抱く人であることも、「あとがき」は伝えている。

以上のことから、ストークがこの文学作品を執筆するのに十分な動機を持っており、自閉症の主人公を描くには有利な立ち位置にあることが分かる。しかし、文学作品としてこの小説を読むとき、ローズの「児童文学の不可能性」の議論の再燃を避けられない。ローズが純真・無垢な主人公を指して、“The child is . . . something of a pioneer who restores these worlds to us, . . .” (9) と言うように、世界を救う無垢な若者像が『マルセロ』でも提示されているからである。無垢なるマルセロ像は、結局のところ、ピーター・パンの「永遠の子ども」像のように、大人の作者がある願望を子どもに抱いて作った、ロマンティックな自閉症の子ども像なのではないだろうか。このマルセロ像は、リアルワールドで様々なつらい症状を抱えて苦闘する現実の自

閉症の当事者像から乖離^{かいり}しているのではないだろうか、という疑念が残る。

8. おわりに

本稿では、まず第1に、自閉症の少年が一人称で語る「声」の信憑性、或いは、作者がどこまでリアルにこの主人公を提示できるのか、という可能性について考察した。第2に、この少年がリアルワールドでどのような居場所を見出すことができるのか、或いは、作者がこの主人公にどのような生き残りの選択肢を与えることができるのか、についても検証・分析した。

上記の考察には、障害者を描く思春期文学の「可能性」を問う本稿のテーマの性質上、ローズが『ピーター・パンの場合』で提起した「児童文学の不可能性」の議論を参照した。ストークは『マルセロ』において、メキシコ系アメリカ人の自閉症スペクトラム障害の少年という、ダブル・マイノリティの主人公を描く。この意味で、マルセロはローズが疑義を唱える「児童文学の不可能性」には該当しない。

さらに、主人公が父親に送り込まれたリアルワールドでの立ち位置とそこでの葛藤の様子を分析した。ダブル・マイノリティの主人公は、ハビトゥスの習俗が著効し、WASP 優勢の社会でもある弁護士事務所というリアルワールドで、「正常」ではない「健常」ではない排除された存在として描かれている。

次に、彼の「声」の信憑性について本稿は、リアルワールドでマルセロの遭遇するモラルディレンマとその対処法の描写を、グランディンの『自閉症に生まれて』と比較しながら分析した。その結果、(1). マルセロの「声」の信憑性は、彼がダブル・マイノリティであること以外に、自閉症の特性であるこだわり（強迫的関心）、感覚過敏、感覚の混乱などが彼の「声」の特徴として描出されており、それらが彼のパーソナリティに特異な魅力を与えている。(2). マルセロの居場所については、ブルデューが「ハビトゥス」理論で言うところの、少数派の立場を彼が選択したこと。或いは、ポストコロニアリズムの「文化の場所」の考え方に沿って、マルセロがリアルワールドの境界外の「中間地点の空間」に居場所を見出し、看護師となり乗馬療法による感覚統合の作業療法を目指すなど、今後のアイデンティティ形成の場にしようとしていることを指摘した。

最終章では、マルセロがイノセントなロマン主義的若者として描かれている点を取りあげ、ナジールが『ぼくたちの見た世界』で語る自閉症のアンドレの物語と比較・検討した。さらにストークには、近親者を含めて自閉症スペクトラム障害の人びとと交流関係を持てる環境にあり、それが彼の本書執筆の動機と関係しているらしいことも指摘した。しかし、ストークがマルセロを過度に純真・無垢な救済者として描写する点で、『マルセロ』は、ローズの言うように作者の願望により作られた、現実の自閉症者から乖離した若者像を読者に提供しているのではないか、との疑念を示した。

本稿は2018年8月1日23rd International Research Society for Children's Literature, Tronto, Canadaでの口頭発表“An Autistic Youth Narrates His Inner Life: *Marcelo in the Real World*”の修正・加筆論文である。

注

- 1) イギリス人精神科医ローナ・ウィング (Lorna Wing) の自閉症を連続体と捉える考え方に基づき (Wing 120), 2013 年にアメリカ精神医学会は, 診断統計マニュアル DSM-5 で, アスペルガー症候群, 広汎性発達障害を含めた自閉症を「自閉症スペクトラム障害」(autism spectrum disorder) と総称した。
- 2) ピーター・パンは, 以下のバリー作品の主人公である。戯曲『ピーター・パンあるいは大人にならなかった少年』(*Peter Pan, or The Boy Who Wouldn't Grow Up*, 1904 年初演), 『ケンジントン公園のピーター・パン』(*Peter Pan in Kensington Gardens*, 1906), 『ピーター・パンとウェンディ』(*Peter and Wendy*, 1911)。ピーター・パンは, 大人向けの小説『小さな白い鳥』(*The Little White Bird*, 1902) に初登場する。
- 3) 社会界 (monde social / social microcosm) とは, 「いわゆる自然界 monde naturel にたいし, 社会的存在としての人間によって構成された世界, 社会的観点からとらえられた世界を指す」(石井洋一郎, ブルデュー I 1979, vii)。
- 4) ゲイ・プライド (gay pride) とは, レズビアン, ゲイ, バイセクシュアル, トランスジェンダー (LGBT) の人々が自己の性的指向や性自認に誇りを持つべきとする概念を表す言葉である。(『weblio 辞書』)
- 5) モーセが「イスラエル人をエジプトから救い出す」ようにとの神の召しを受けたのは, ホレブ山で「燃える柴」を見届けようとしたためである。(『聖書』「出エジプト記」3: 1-10。)
- 6) 動物科学のスペシャリスト (元コロラド州立大学教授), グランディンは, 自閉症の人としては初めての自叙伝『我, 自閉症に生まれて』を出版して世間の注目を集め, 2010 年には『タイムズ』誌に「世界で最も影響力をもつ 100 人」に選ばれた。
- 7) 感覚統合 (sensory integration) とは, アメリカの作業療法士 A. ジーン・エアーズ (A. Jean Ayres 1923-1988) により提唱・実践された自閉症の子ども向けの作業療法の 1 つ。子どもたちの五感, 固有受容覚 (手足の状態・筋肉の伸縮・関節の動きを感じる感覚), 前庭覚 (身体の動き, 傾き, スピードを感じる感覚) の機能を調整 (統合) すること。(「〈感覚統合〉とは?」『Litalico 発達ナビ』; Ayres 『子どもの発達と感覚統合』278, 280-81)

引用文献

- Ayres, A. Jean. (1928) 『子どもの発達と感覚統合』佐藤剛監訳, 協同医書出版社。
- バーバ, K・ホミ (2005) 『文化の場所——ポストコロニアリズムの位相』本橋哲也・正木恒夫・外岡尚美・坂元留美訳, 法政大学出版局。(Bhabha, Homi K. *The Location of Culture*. London & New York: Routledge, 1994.)
- Barry, James Mathew. *Peter Pan*. 1911. London: Puffin, 2008.
- ブルデュー, ピエール (1990) 『ディスタンクシオン』I, II, 石井洋一郎訳, 藤原書店。(Bourdieu, Pierre. *La Distinction: Sociale du Jugement*. Edition de Minuit, 1979)
- Bourdieu, Pierre. “The Field of Cultural Production, or : the Economic World Reversed.” *Poetics* 12 (1983): 311-56.
- Dunn, Patricia A. *Disabling Characters: Representations of Disability in Young Adult Literature*. New York: Peter Lang, 2015.
- Grandin, Temple. *Emergence: Labeled Autistic*. 1986. New York: Warner Books, 2005. ((1994) 『我, 自閉症に生まれて』カニングハム久子訳, 学習研究社。)
- . *Thinking in Pictures: And Other Reports from My Life with Autism*. 1995. New York: Bloomsbury, 2006. ((1997) 『自閉症の才能開発——自閉症と天才をつなぐ環』カニングハム久子訳, 学習研究社。)
- 本田秀夫 (2013) 『自閉症スペクトラム——10 人に 1 人が抱える「いきづらさ」の正体』SB 新書。
- 「〈感覚統合〉とは? 発達障害との関係, 家庭や学校のできる手助けとまとめ」『Litalico 発達ナビ』

- <https://h-navi.jp/column/article/35025964> 2019.8.17.
- Margolis, Rick. "Saint in the City: Francisco X. Stork's Latest Novel Is *Marcelo in the Real World*." *School Library Journal*. (March 2009): 29.
- 宮島喬 (2012) 「ハビトゥス」『現代社会学事典』弘文堂。
- Nazeer, Kamran. *Send in the Idiots: Or How We Grew to Understand the World*. London: Bloomsbury Publishing, 2006. ((2011)『ぼくたちが見た世界—自閉症者によって綴られた物語』神崎朗子訳、柏書房。)
- "Families Helping Families." *Spina Bifida Family Support*. www.spinabifidasupport.com web. Accessed 21 May 2018.
- Rose, Jacqueline. *The Case of Peter Pan: The Impossibility of Children's Fiction*. 1984. Philadelphia, U of Pennsylvania P, 1992. ((2009)『ピーター・パンの場合——児童文学などありえない?』鈴木晶訳、新曜社。)
- 『聖書』(新共同訳)(2009)日本聖書協会。
- Stork, Francesco X. *Marcelo in the Real World*. New York: Scholastic, 2009. ((2013)『マルセロ・イン・ザ・リアルワールド』千葉茂樹訳、岩波書店。)
- 杉山登志郎 (2011)『発達障害のいま』講談社。
- 土田玲子監修 (2013)『感覚統合 Q&A 第2版——子どもの理解と援助のために』共同医書出版社。
- Weblio 辞書, <https://www.weblio.jp/content/ゲイ・プライド>, web. 2019. 4. 28.
- Wing, Lorna. "Asperger's Syndrome: a Clinical Account." *Psychological Medicine* 11 (1981): 115-29.